

インフラツーリズムのその先へ

“インフラツーリズム”という用語自体、ここ数年でかなり市民権を得てきたのではないか。書店にはインフラツーリズムを冠した書籍や雑誌が並び、インターネットで検索すれば数多のインフラツーリズムサイトがヒットする。インフラツーリズムとは、平たく言えば、観光を手段としてインフラの役割や機能などの理解を促進するとともに、インフラの来訪者に回遊行動を促すことで、そのインパクトを周辺地域の活性化に波及させようとする取組と言えよう。

インフラツーリズムは、平成25年にまとめられた『観光立国実現に向けたアクション・プログラム』において、ニューツーリズムの一つに位置付けられた。その後、平成28年に「インフラツーリズムポータルサイト」が開設され、同年策定の『明日の日本を支える観光ビジョン』では、「地域振興に資する観光を通じたインフラの活用」が施策に掲げられた。平成30年には、国土交通省をはじめとする関連省庁や学識者で構成される「インフラツーリズム有識者懇談会」が設置され、モデル地区における実践を踏まえながら、インフラツーリズムのあり方や推進方策等が議論されている。その成果は、令和元年の試行版を経て、令和5年に『インフラツーリズム拡大の手引き—改訂版—』としてまとめられた。さらに、令和5年に策定された『観光立国推進基本計画』では、「インフラツーリズムの推進」が施策の一つに挙げられている。また、こうした国の施策と並行して、全国各地でインフラツーリズムの多様な取組も展開されている。

一方、こうして“インフラツーリズム”という用語が世に出る前から、そこに通ずる取組は進められてきた。平成15年に『美しい国づくり政策大綱』や『観光立国行動計画』が発表されて以降、インフラを観光資源として捉え直す機運が高まり、たとえば土木学会誌や業界誌などでは、「土木観光」をテーマとした特集がいくつも組まれた。

さらに、実はそれ以前から、インフラは観光資源として地域活性化に貢献してきたのである。

ずいぶんと時代をさかのぼるが、江戸幕府の8代将軍徳川吉宗は、享保の改革の一環として、地域の特色を生かした産業と農作物生産を奨励した。いわば、江戸版の地方創生である。こうした施策を支えたのは、全国をネットワークする交通・物流網、すなわち街道や河川舟運・海運路であった。特に街道は、多くの人と物の往来を支え、『東海道中膝栗毛』などのいわゆる道中記が数々出版されたことからわかるように、街道をゆく移動自体も旅の一部として楽しまれた。また、浮世絵や図会によく描かれているように、橋梁をはじめとするインフラは、名所すなわち観光資源として多くの旅行者に親しまれた。たとえば、日本三名橋の一つに数えられる山口県岩国市の錦帯橋などは、旅行者が街道を外れて、わざわざ遠回りをしてまで見に来たそうである。

時代が下り明治に入ると、西洋技術を用いたインフラが全国各地に次々と建設され、国土の近代化を支えるとともに、新たな景観を創出していった。それらは、まさしく近代化の象徴として人々に受け入れられ、江戸時代同様に名所として親しまれた。その証左として、土木学会附属土木図書館のデジタルアーカイブスをご覧いただければわかるように、当時のインフラの堂々とした姿が数々の絵葉書に収められている。

戦後になると、戦災復興、東京オリンピック、そして高度経済成長といった、時の社会経済を支える大規模インフラが次々と誕生し、それらは経済発展や右肩上がりの時代の象徴として注目された。黒部ダムなどはその代表例であろう。その後も、横浜ベイブリッジや本州四国連絡橋をはじめとする長大橋など、わが国の技術の粋を集めたインフラが人々を魅了してきた。

ところが、バブル期以降しばらくは、「ダムは無駄」あるいは「コンクリートから人へ」といっ



日本大学 理工学部 まちづくり工学科 教授 **あべ たかひろ**
阿部 貴弘

たフレーズに象徴されるように、インフラに対する負のイメージが広く社会に蔓延し、とりわけ、過剰な装飾を施したインフラなどが批判のやり玉に挙げられた。それでも、ダムマニアや橋マニアなど、インフラ好きの人々は実に熱心にインフラに足を運び、その熱意はダムカードなどインフラを楽しむ種々のツールの開発にもつながった。もちろん、建設業界全体も、社会の理解を得るべく様々な努力を積み重ねてきた。

一方、東日本大震災以降は、頻発する大規模自然災害が人々のインフラへの関心を高め、安全で安心な日々の暮らしを支えるインフラ本来の役割が、比較的フェアに評価されるようになってきた。そして、先に見たインフラツーリズムの施策展開へとつながるのである。

こうした歴史を振り返れば、インフラツーリズムの行く末が自ずと見えてこよう。

何より欠かせないのが、質の高いインフラ整備である。ここでいう質とは、技術の質であり、空間の質である。現在、そして将来起きうであろう課題に対して、最新の技術を駆使していかに向き合うか、土木技術者の知恵と工夫の結晶であるインフラは人々の共感を呼ぶ。また、そうしたインフラが創出する空間や景観に、人々は感動を覚えるであろう。必ずしも、うわべだけの過剰な演出は必要ないのである。

さらに、質の高いインフラ整備に向けて、インフラツーリズムを単なる“インフラの観光利用”にとどめるのではなく、インフラの構想・計画・設計・施工・維持管理の各段階において、標準設計に対して“観光”を意識した工夫を施すなど、最終的に質の高いインフラ整備につなげる意識づくりや仕組みづくりが必要であろう。また、イン

フラツーリズムによる直接的な観光収益をインフラの整備及び維持管理に還元する仕組みについても検討の余地があろう。

これらは、必ずしも新たに整備される大規模インフラだけではなく、まちなかの小規模なインフラや齢を重ねたインフラにもあてはまる。たとえば、それぞれのインフラの来歴や建設秘話、建設に携わった人物や建設後の周辺地域の変化などを知れば、風景に対する見方が変わり、一見何気ない日常の風景であっても、新たな風景として立ち現れてくることもある。その体験は、まさしく非日常の体験である。浮世絵や図会に学ぶまでもなく、見せ方や伝え方が大事なのである。

ここまで見てきたように、少々大袈裟に言えば、わが国には数百年に及ぶインフラツーリズム的な取組の蓄積がある。さらに今号の特集では、その最新のノウハウが多数紹介されている。こうした知見を踏まえつつ、今後、後世の評価に耐えうる質の高いインフラツーリズムが展開されることに期待したい。

<参考文献>

- 1) 野中美貴子・阿部貴弘：インフラツーリズムの効果に関する研究、土木学会論文集、Vol.79、No.2、22-00016、2023。
- 2) 阿部貴弘：地域のインフラを活用した観光の可能性、都市自治体におけるツーリズム行政—持続可能な地域に向けて—、pp.61-89、公益財団法人日本都市センター、2021。
- 3) 阿部貴弘：土木人のための土木観光論—実践、土木遺産ツアーの舞台裏—、土木学会誌、Vol. 99、No.6、pp.16-19、2014。

【著者紹介】阿部 貴弘 (あべ たかひろ)

昭和48年東京都生まれ。平成8年東京大学工学部土木工学科卒、平成11年同大学院工学系研究科社会基盤工学専攻修士課程修了。博士(工学)。技術士(建設部門 都市及び地方計画)。パシフィックコンサルタンツ株式会社、国土交通省国土技術政策総合研究所、日本大学理工学部准教授を経て、平成30年4月より現職。専門は、都市史、土木史、景観。令和4年度土木学会研究業績賞ほか受賞。